

スカイプによる海外高校とのCLIL指導法を用いた授業の実施

名古屋市立名東高等学校 教諭 西尾 新

キーワード：高校、英語、歴史、CLIL、内容言語統合型学習、スカイプ、海外交流、フィンランド

1. 従来 の 課題

近年、世界のグローバル化が進み、日本においてもグローバル人材の育成が求められている。そのような中で我々教員は、基礎的な知識・技能を活用し、主体的に考え、判断できる力、他者と協調し社会を形成していく力の育成を求められている。そこで、日常の授業のなかで生徒が協働的に新しい課題に挑戦できる場をつくり、生徒の「生きる力」を育成したいと考え、教科の内容を学びつつ語学力を高める学習法CLIL（内容言語統合型学習）という指導法を取り入れた授業を試みている。これまでに芹川・西尾は、目標言語での新知識のインプット→実験・調査→グループでのまとめ→目標言語での発表・発信という4ステップから成るCLIL授業のフレームワーク作りを行った[1]。本校ではこのフレームワークをアレンジした、体験重視の授業が増えつつある。英語と生物、現代社会と英語、国語と英語、英語と生物と現代社会など、異なる教員がそれぞれ実践した。少しずつであるが、自ら課題を発見し、仲間とともに解決に向う生徒を育成しようという雰囲気が、校内に広がってきていると感じている。

しかし、発表場所が、クラス内、校内でとどまっていたため、学んだ知識を他言語で発表・発信する意義を生徒たちが理解しづらく、CLIL授業に対する生徒たちのモチベーションが下がってしまうことがあった。そこで、スカイプを用いて他国とリアルタイムでつなぎ、実際に英語の話者に対して発表し、さらには相手からも学ぶという機会を設ければ、生徒達は英語を通して自分の知識を伝える楽しさを実感できると考え、本実践を行った。

2. 目的・目標

(1) CLILを推進するためのインターネット・スカイプ通信の活用

ヨーロッパ諸国で広く行われているCLILは、教科の内容を学びながら、言語知識や技能などの語学力を高める指導法で、教科の内容と語学の双方の習得を目指す過程で、思考と他者との学びも意識的に行うようにしている。この指導法は、文科省が高等学校教育に求めている「主体的・協働的な学習・指導方法であるアクティブラーニングへの飛躍的充実を図る」ことを可能にし[2]、さらには教科内容と語学も同時に習得することができる。本実践では、歴史的事実について生徒たちが自ら決めたテーマについて英語による文献をインターネットから探して読み、既習の知識を元に情報を精査し、スカイプを通じて英語で発信し海外の学生と共に英語で学ぶことで、主体的・協働的な学びへとつなげ、さらに学習内容と使用言語も習得できるような学習環境を作ることができると考えた。

(2) 相手を意識した英語発信力と生徒の自尊感情の強化

スカイプ通信を通して他国の英語学習者と直接コミュニケーションをとることで、英語での即聴即答が必

要とされる。自ら調べた情報や知識を元に英語で即座に返答ができた成功体験は、生徒に自尊感情を与え、誤りを恐れずに自分の言葉で知識や気持ちを発信できる生徒が育成できると考えた。

3. 実践内容

3.1 フィンランド・エテラタピオラン高校との実践

フィンランドのエテラタピオラン高校と本校の生徒が、歴史をテーマにした内容言語統合学習（以下CLIL）の授業を行った。

本実践の相手校があるフィンランドは、日本と同じ環境で英語が第二言語であり、CLILが盛んに行われており、2カ国で合同授業を実施できる素地があった。また、スカイプはフリーソフトであり容易に手に入るが、一方でアカウントを使用するため個人情報に配慮する必要があり、先方との関係構築が鍵となる。本実践の前には、名古屋市支援の下、CLIL先進校のエテラタピオラン高校に自ら連絡を取って訪問し意見交換をした[3]ところ、先方も同じように他の国との交流授業の経験が必要と感じていることがわかった。そこで、教科の中でも互いの国の背景や考え方が反映しやすい歴史をテーマとすることで合意し、相手校の教諭と密に連絡を取り合い、お互いのスカイプアカウントを使って本実践を行うに至った。

形式は、それぞれ担当の風刺漫画についてその歴史背景について英語で説明する形式を採った。題材は、先方の歴史担当教諭と事前に話し合い、日本とフィンランドのお互いが知っている歴史テーマとして日本側が「ペリー来航」、フィンランド側が「日清・日露戦争」を題材とすることに決定した。実践は1時限を46分とし、3時限を使って行った。対象はCLILの授業経験のある国際英語科3年生とし、教員がランダムに分けたペアでインターネットを使用して調査・発表準備をした後で、映像と会話のやりとりができるスカイプ通信を用いて海外高校生と英語で交流授業をすることとした。

1・2時限目：インターネットを用いた調査・発表準備

日本側の「ペリー来航」というテーマは生徒にとつてなじみ深い歴史的な出来事であったので、キーワードのみ教師が英語で紹介し、詳細は英語で書かれたウェブサイトや調査するよう指示した。自分たちの発言が海外の人たちに新たな知識として伝わるという責任を自覚させた上で、手順や発表方法、すでに持っている知識のどの部分を詳しく説明したいのかなどの決定は生徒に委ねた。生徒同士の話し合いの結果、①ペリーに関する基本情報・来航目的 ②ペリー来航前の日本の状況 ③日本の対応・影響 ④日本の歴史教科書でのペリー来航のとらえ方、の4項目について担当を決め、その項目をよく調べて発表することとした。調査の際はネット上の情報を鵜呑みにするのではなく、

①ソースを選ぶこと、②既習の知識と照らし合わせ考
えることを注意として伝えた。

3 時限目：スカイプ通信を用いた交流授業

スカイプを利用した授業は、①自己紹介、②本校側
発表と質疑応答、③フィンランド側発表と質疑応答、
④お互いの学校生活に関する質疑応答、の流れで 30
分間すべて英語のみで行った。写真①には、その様子
を示す。通信が繋がった瞬間、双方から「本当に海外
と繋がってる！」と感動の声があがった。

本校側の発表と質疑応答の進行は1・2限目に打ち
合わせしておき、すべて生徒に任せた。発表の際には
相手に分かりやすい工夫をするよう指導していたので、
生徒達は絵などの補助資料を事前に準備し、クイズ形
式も取り入れて説明していた。

フィンランドの高校生の発表では、「東洋モンロー
ドクトリン」と名のついた風刺画についてエテラタピオ
ラン高校の生徒から解説があり、日本の教科書には掲
載されていない風刺画であったため、生徒たちは興味
深く聞いていた。

互いの国の質疑応答では、本校生徒が「オーロラを
見たことがあるか」と質問したところ、フィンランド
のほとんどの生徒が見たことがあると答えたため、予
想外の答えに驚きの声が上がっていた。フィンランド
からは、「アニメに登場する日本の学校生活は本当か」
と質問され、生徒たちは英語の誤りを恐れず、即座に
実際の学校の様子を答えていた。



写真1 スカイプを用いて交流する様子

4. 成果

(1) 英語での即聴即答ができたことで生徒の自信に
つながった。

実際に同世代の外国の学生とリアルタイムで話すこ
とで、外国の学生の英語をその場で聞き取り、その質
問に対してすぐに英語で返答をしなくてはいけない状
況におかれることになった。その状況が、即興で文を
組み立てて答えることを可能にし、この経験は自信に
繋がったようだ。スカイプ通信が終わった後も興奮冷
めやらぬ様子で、「直接他国の同世代の学生と英語でや
りとりができたことで自信になった」という声が多く
聞かれた。

(2) 生徒たちの主体性が養われた。

教員からの指示で動くのではなく、自主的に調査を
し、海外の聞き手を意識することで、自分が面白いと
思ったことを教えてあげたい、これについてはあまり
知識がないけれど、もう少し勉強して教えてあげたい
など、自ら考えて意欲的に学習する姿勢が育まれた。

(3) 海外高校との繋がりを構築できた

相手校の教諭からは授業終了後すぐに、先方の生徒
達もこのような機会をもっと頻繁にもちたいという感
想を述べており、スカイプ通信を利用した授業は大成
功だったとの感想をいただいた。また、この交流が先
方のHPに掲載され(写真②)、さらなる共同実践も企
画されており、学校間の繋がりが深めることができ
たと考える。



写真2 交流授業の様子が紹介された
「エテラタピオラン」高校のHP

(4) 交流授業を通じて英語の語彙力や表現力が向上 した

「幕府」、「～寄り」、「満州事変」、「同盟」など、歴
史を説明する上で必要な単語や表現を繰り返し使用し
たり、スカイプを通じて相手側から何度も聞いたりし
たことにより、単語や表現が生徒に定着したようだ。
交流授業から約一年たった現在でも、卒業生として本
校に遊びに来た元生徒達から「フィンランドの子に教
えてもらった英単語」の話が出てくるほどである。

5. 今後に向けて

個人のアカウントを使用したためスカイプ通信用の
カメラが一つしかなく、生徒は一人ずつ順番でしか話
すことができない問題があった。一人一人の生徒によ
り多く話す機会を与えられるよう、情報科と連携して
テレビ会議システムを採用する等のより良い環境を整
えていければと考えている。

参考・引用文献

[1] 芹川真琴・西尾新, アクティブラーニングを推進す
るためのCLIL(内容言語統合学習)のフレームワーク
づくり, 鳴門教育大学学校教育学会学会誌 No. 31
(2015).

[2] 中央教育審議会, ”新しい時代にふさわしい高大接
続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入
学者選抜の一体的改革について(答申)” 文部科学省,
2016-09-29.

[3] 西尾新, 北欧における内容言語統合学習(CLIL)の
取り組みについて, 名古屋市若手教員海外派遣研修報
告書(2015).